

**[D年] 聖霊降臨節第7主日(2024年6月30日)****【旧約聖書日課】 ホセア書 14章2〜8節**

- 2 イスラエルよ、立ち帰れ  
あなたの神、主のもとへ。  
あなたは谷につまずき、悪の中にいる。
- 3 誓いの言葉を携え  
主に立ち帰って言え。  
「すべての悪を取り去り  
恵みをお与えください。  
この唇をもって誓ったことを果たします。
- 4 アッシリアはわたしたちの救いではありません。  
わたしたちはもはや軍馬に乗りません。  
自分の手が造ったものを  
再びわたしたちの神とは呼びません。  
親を失った者は  
あなたにこそ憐れみを見いだします。」
- 5 わたしは背く彼らをいやし  
喜んで彼らを愛する。  
まことに、わたしの怒りは彼らを離れ去った。
- 6 露のようにわたしはイスラエルに臨み  
彼はゆりのように花咲き  
レバノンの杉のように根を張る。
- 7 その若枝は広がり  
オリーブのように美しく  
レバノンの杉のように香る。
- 8 その陰に宿る人々は再び  
麦のように育ち  
ぶどうのように花咲く。  
彼はレバノンのぶどう酒のようにたたえられる。

**【使徒書日課】 使徒言行録 9章36〜43節**

<sup>36</sup>ヤッファにタビタ—訳して言えばドルカス、すなわち「かもしか」—と呼ばれる婦人の弟子がいた。彼女はたくさんの善い行いや施しをしていた。<sup>37</sup>ところが、そのころ病気になるって死んだので、人々は遺体を清めて階上の部屋に安置した。<sup>38</sup>リダはヤッファに近かったので、弟子たちはペトロがリダにいると聞いて、二人の人を送り、「急いでわたしたちのところへ来てください」と頼んだ。<sup>39</sup>ペトロはそこをたつて、その二人と一緒に出かけた。人々はペトロが到着すると、階上の部屋に

案内した。やもめたちは皆そばに寄って来て、泣きながら、ドルカスが一緒にいたときに作ってくれた数々の下着や上着を見せた。<sup>40</sup>ペトロが皆を外に出し、ひざまずいて祈り、遺体に向かって、「タビタ、起きなさい」と言うと、彼女は目を開き、ペトロを見て起き上がった。<sup>41</sup>ペトロは彼女に手を貸して立たせた。そして、聖なる者たちとやもめたちを呼び、生き返ったタビタを見せた。<sup>42</sup>このことはヤッファ中に知れ渡り、多くの人が主を信じた。<sup>43</sup>ペトロはしばらくの間、ヤッファで革なめし職人のシモンという人の家に滞在した。

**【福音書日課】 ヨハネによる福音書 4章43〜54節**

<sup>43</sup>二日後、イエスはそこを出発して、ガリラヤへ行かれた。<sup>44</sup>イエスは自ら、「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」とはっきり言われたことがある。<sup>45</sup>ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した。彼らも祭りに行ったので、そのときエルサレムでイエスがなされたことをすべて、見ていたからである。<sup>46</sup>イエスは、再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、前にイエスが水をぶどう酒に変えられた所である。さて、カファルナウムに王の役人がいて、その息子が病気であった。<sup>47</sup>この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞き、イエスのもとに行き、カファルナウムまで下って来て息子をいやして下さるように頼んだ。息子が死にかかっていたからである。<sup>48</sup>イエスは役人に、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言われた。<sup>49</sup>役人は、「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」と言った。<sup>50</sup>イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。<sup>51</sup>ところが、下って行く途中、僕たちが迎えに来て、その子が生きていることを告げた。<sup>52</sup>そこで、息子の病気が良くなった時刻を尋ねると、僕たちは、「きのうの午後一時に熱が下がりました」と言った。<sup>53</sup>それは、イエスが「あなたの息子は生きる」と言われたのと同じ時刻であることを、この父親は知った。そして、彼もその家族もこぞって信じた。<sup>54</sup>これは、イエスがユダヤからガリラヤに来てなされた、二回目のしるしである。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## ホセア書 14章2～8節

2 イスラエルよ、立ち帰れ

あなたの神、主のもとへ。

あなたは自分の罪につまずいた。

3 あなたがたは言葉を用意し

主に立ち帰って、言え。

「どうぞ罪をすべて赦し

良いものを受け取ってください。

私たちは唇の実を献げます。

4 アッシリアは我々の救いとはなりません。

我々はもはや、馬には乗りません。

自らの手の業にすぎないものを

私たちの神だとは二度と言いません。

ただあなたによってこそ

みなしごは憐れみを受けるのです。」

5 私は、背いた彼らを癒し

喜んで愛する。

私の怒りは彼らから離れる。

6 私はイスラエルにとって露のようになる。

彼は百合のように花を咲かせ

レバノン杉のようにその根を下ろす。

7 その若枝は茂り、麗しきはオリーブの木のように

かぐわしきはレバノン杉のようになる。

8 人々は帰って来て、その陰に宿り

穀物のように実り

ぶどうの木のように芽を吹く。

彼はレバノンのぶどう酒のように記憶される。

## 使徒言行録 9章36～43節

36 ヤッファにタビタ——訳すとドルカス〔「ガゼル」の意〕——と言う女の弟子がいた。数々の善い行いや施しをしていた人であった。37ところが、その頃病気になって死んだので、人々は遺体を清めて階上の部屋に安置した。38リダはヤッファに近かったので、弟子たちはペトロがリダにいて聞いて、二人の人を送り、「どうか、私たちのところへ来てください」と頼んだ。39ペトロはそこをたって、一緒に出かけた。ペトロが到着すると、人々は階上の部屋に案内した。やもめたちは皆そばに寄って来て、泣きながら、ドルカスと一緒に

作った数々の下着や上着を見せた。40ペトロが皆を外に出し、ひざまずいて祈り、遺体に向かって、「タビタ、起きなさい」と言うと、彼女は目を開き、ペトロを見て起き上がった。41ペトロは彼女に手を貸して立たせた。そして、聖なる者たちとやもめたちを呼び、生き返ったタビタを見せた。42このことはヤッファ中に知れ渡り、多くの人が主を信じた。43ペトロはしばらくの間、ヤッファで革なめし職人のシモンと言う人の家に滞在した。

## ヨハネによる福音書 4章43～54節

43二日後、イエスはそこを出発して、ガリラヤへ行かれた。44イエスご自身は、「預言者は、自分の故郷では敬われないものだ」と証言されたことがある。45ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した。彼らも祭りに行ったので、その時エルサレムでイエスがなされたことをすべて、見ていたからである。

46イエスは、再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、前にイエスが水をぶどう酒に変えられた所である。さて、カファルナウムに王の役人がいて、その息子が病気であった。47この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞き、イエスのもとに行き、カファルナウムまで下って来て息子を癒してくださいるように頼んだ。息子が死にかかっていたからである。48イエスは役人に、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言われた。49王の役人は、「主よ、子どもが死なないうちに、お出でください」と言った。50イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きている。」その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。51ところが、下って行く途中、僕たちが迎えに来て、その子が生きていることを告げた。52そこで、息子が良くなった時刻を尋ねると、僕たちは、「昨日の午後一時に熱が下がりました」と言った。53それが、イエスが「あなたの息子は生きている」と言われたのと同じ時刻であったことを、父親は知った。そして、彼もその家族もこぞって信じた。54これは、イエスがユダヤからガリラヤに来てなされた、第二のしるしである。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・6月30日「聖霊降臨節第7主日」の日課主題は「生命の回復」。

・旧約聖書日課は、「ホセア書」から、最終章のエフライムの回復を預言する箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、タビタの復活の逸話箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、主イエスがガリラヤのカナに赴かれて王の役人の息子を癒された逸話の箇所。

**旧約日課(ホセア 14章より)**

・「ホセア書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第四巻「十二小預言者」の第一に置かれた預言文書。「ホセア」は、前8世紀、北王国イエフ王朝の最盛期をもたらしたヤロブアム王の下で宮廷預言者として活動を始め、ヤロブアム王没後、おそらく政治亡命をして南王国に渡り、同国の四代の王に宮廷預言者として仕えた人物。南王国に渡ってからの活動時期は、ほぼ「イザヤ」と重なる。ヤロブアム王没後に王位継承を巡って混乱する中で南王国に亡命し、軍事侵攻を強めていたアッシリアによって滅ぼされていく北王国でベテルをはじめとする王国聖所に振り回される政治体制の現実を傍から批判する預言を告げたと考えられる。「ホセア」は、ヤロブアム王に仕えた宮廷預言者であったため、同王没後のイエフ王朝断絶と新王朝の成立により旧体制派として肅清対象になることを避けて、南王国に亡命したと考えられる。その出自について、「ベエリの子ホセア」(1:1)とされており、祭司の家系に属する者であった可能性が高いと考えられるが、詳細なことは知られていない。

・アッシリアの侵攻が強められた時期、南王国は北王国からの対アッシリア同盟要請を拒み、アッシリアの属国となる道を選び、生き残った。そのとき、「イザヤ」は、北王国の強請に悩む王に対して、北王国に屈することもアッシリアに頼ることもなく「主」に頼むように助言している(イザヤ7章)。この「イザヤ」の預言と呼応するように、「ホセア」は、自分の仕えたヤロブアム王没後にイエフ王朝が断絶して王権奪取を巡る権力闘争に明け暮れる北王国イスラエルに対して、アッシリアの庇護に入ることで王権を維持しようとするのではなく、主に立ち帰ることでイスラエルの回復を希望するように告げている。

・「ホセア」は、南王国亡命後、「イザヤ」と同じくヒゼキヤ王の時代まで宮廷預言者として活動したものとされている(1:1)。すなわち、北王国イスラエルの都サマリアがアッシリアにより陥落、滅亡(前721年頃)した後の時期にも南王国で宮廷預言者として活動していたと考えられるが、南王国ユダに関する預言句は本書に残されていない。にもかかわらず正典に加えられたのは、「ホセア」が同時代の「イザヤ」など南王国の祭司・預言者らに大きな影響を与えた人物であったからなのだろう。

**使徒書日課(使徒9章)**

・「使徒言行録」は、「ルカによる福音書」の続巻としてまとめられた「初代教会正史物語」。主イエスの復活・昇天後に残された使徒たちの集団が「教会」としての活動を始め、そこに新たに加わったディアスポラ系ユダヤ人を介在して地中海世界に広く「教会」を展開するに至った経緯を、前半は使徒ペトロを中心に、後半はパウロを中心に物語る。本書と「ルカ福音書」は、パウロに近い人物によって執筆されたものと考えられ、「教会」の世界展開においてパウロが果たした役割を強調している一方、ペトラら他の使徒が精力的に「教会」形成に勤しんだローマやシリア・アンティオキア、エジプト・アレクサンドリアなどの事情については限られた情報しか含まれていない。

・日課箇所は、使徒ペトロがヤッファの教会メンバーであった女性信者タビタ=ドルカスの葬儀に招かれ、彼女をよみがえらせたという逸話物語。この逸話は、初代教会の第一の指導者と目された使徒ペトロが初期に為したとされるいくつかの奇跡のひとつである(他の奇跡は、足の不自由な人を癒す=3章、アナニアとサフィラの出来事=5章、魔術師シモンの回心=8章)。本書は、パウロ=サウロを登場させるのに先行させて、使徒ペトロの為した特別な御業を描き、彼の第一人者たる姿を認めるように読者に促しているのだろう。

・「タビタ」は、「婦人の弟子」と紹介されているが、どの時点で「教会」に加わった者かは不明。本書は、このときすでにヤッファに「教会」共同体が形成されつつあったことを示している。タビタが死んだとき、近隣15キロほどの町リダに来ていたペトロをすぐに呼んでいることから、エルサレムの「教会」共同体の支部、そうでなくてもペトロの指導下にある共同体だった、ということなのだろう。

・死んだタビタに対するペトロの振る舞いは、福音書で「ヤイロの娘の復活」の逸話における主イエスの振る舞いと酷似している。使徒らの言行を主イエスの言行に倣ったものとして描くのは、本書の特徴である。

・本書の構成上、この逸話は、続く章で大部を割いて描かれる「百人隊長コルネリウス一家の入信」の説話物語を準備するものとなっている。すなわち、ペトロがこのヤッファに滞在しているときに見た幻(白昼夢)が、異邦人コルネリウスの使者を迎え入れ、彼を「教会」メンバーとするようにという主の御心を示すものであったとされる。コルネリウスは、カイサリアに滞在していたが、ペトロはヤッファからそこまで彼を訪ねて行くことになる。ヤッファは、エルサレムから西北西に60キロほどの港町で、この地域で古くから港湾として発展した数少ない都市のひとつ。ヤッファから北60キロほどの距離に、ローマ帝国支配時代のユダヤ州総督府が置かれたカイサリアがある(60キロは鎌倉から熱海までの距離に相当)。

## 福音書日課(ヨハネ 4 章より)

・日課箇所は、主イエスが王の役人の息子を癒した逸話で、「マタイ」および「ルカ」が並行する逸話を伝えている(マタイ 8:5~13、ルカ 7:1~10)。

・「マタイ」と「ルカ」は、この逸話を主イエスがカファルナウムに滞在していたときのこととして伝えているが、「ヨハネ」は、主イエス一行がサマリアを発ってガリラヤ地方の故郷近くに帰って活動をされ、カナの町に滞在していたときのこととして伝えている。ただし、くだんの王の役人と息子はカファルナウムにいるものとされている。「ヨハネ」は、「共観福音書」も伝えている「預言者は自分の故郷では敬われない」という主イエスの句を伝えながら、このときガリラヤの人々に主イエスが歓迎されたとしており、評価が異なる。「ヨハネ」は、主イエスのガリラヤでの活動を、婚礼におけるぶどう酒の奇跡をなされた「カナ」に集約して描いており、その出来事ゆえに故郷にもかかわらず受け入れられた、と評価しているのであろう。それゆえ、この出来事をカファルナウムではなく「カナ」滞在中のこととしている

・「ヨハネ」が「王の役人」とする人物を、「マタイ」と「ルカ」は「百人隊長」として伝えている。カファルナウムは、ガリラヤ湖北端に位置する交易路の要衝で、当時、ローマ軍団の駐屯地もこの付近に置かれていた。ユダヤ人も多く居住しており、「ルカ」は、この「百人隊長」がユダヤ人のために「会堂」を建てるなど、住人に対して好意的な人物であったことを伝えている。さらに、「マタイ」も「ルカ」も、この「百人隊長」の主イエスに対する態度を高く肯定し、「信仰(ピステイス)」の手本となる人物として描いている。他方で「ヨハネ」は、この人物を必ずしも「信仰」の模範となるような人物とは描いていない。

## 来週の誕生日 (7月7日~13日)

## 主日礼拝の讚美歌から

・21-356「インマヌエルの主イエスこそ」(= I 161)は、作詞者アレンドルフは、18 世紀ドイツの牧師で、敬虔派詩人として知られ、J.S.バッハと入れ違いにケーテン宮廷説教者としても務め、『ケーテン讚美歌集』を編纂。その中の一曲で、作曲者は不明。

・21-56「主よ、いのちのパンをさき」(= I 187)は、19-20 世紀米国のメソジスト信徒メアリー・ラスベリーの作詞で、夏期セミナーのために「聖書研究の歌」と題して書かれた。曲は、19 世紀米国で讚美歌作曲家として知られた音楽教師シャーウィンが、この歌詞のために作曲。

・21-516「主の招く声」は、S.ウェスレーに影響を受けて教会音楽家となった 19 世紀英国人パリーのオラトリオ「ユディト」の中の曲で「讚美歌集」(1924 年版)に採用された旋律に、新しい歌詞を付けて歌うべくグリーンが 1981 年に作詞した。英語原詞は 4 節だが、日本語訳では 5 節に拡大してまとめている。

## 21-356「インマヌエルの主イエスこそ」

## Einer ist König, Immanuel sieget

1. Einer ist König, Immanuel sieget! / Bebet, ihr Feinde, und gebet die Flucht! / Zion hingegen, sei innig vergnügt, / labe dein Herze mit himmlischer Frucht! / Ewiges Leben, unendlichen Frieden, / Freude die Fülle hat er uns beschieden.
2. Stärket die Hände, ermuntert die Herzen, / trauet mit Freuden dem ewgen Gott! / Jesus, die Liebe, versüßet die Schmerzen, / reißet aus Ängsten, aus Jammer und Not. / Ewig muß unsere Seele genesen / in dem holdseligsten lieblichen Wesen.
3. Halte, o Seele, im Leiden fein stille, / schlage die Rute des Vaters nicht aus; / bitte und schöpfe aus göttlicher Fülle Kräfte, / zu siegen im Kampfe und Strauß! / Fluten der Trübsal verrauschen, vergehen; / Jesus, der Treue, bleibt ewig dir stehen.
4. Zion, wie lange hast du nun geweinet? / Auf und erhebe dein sinkendes Haupt! / Siehe, die Sonne der Freuden erscheint / tausendmal heller, als du es geglaubt. / Jesus, der lebet, die Liebe regieret, / die zu den Quellen des Lebens dich führt.
5. Laufet nicht hin und her, eilet zur Quelle! / Jesus, der bittet: "Kommt alle zu mir!" / Sehet, wie lieblich, wie lauter und helle / fließen die Ströme des Lebens allhier! / Trinket ihr Lieben, und werdet erquicket: / hier ist Erlösung für alles, was drückt.
6. Streitet nur unverzagt, seht auf die Krone, / die euch der König des Himmels anbeut. / Selber der Herr wird den Siegern zum Lohne; / wahrlich, dies Kleinod verlohnet den Streit! / Streitet nur unverzagt, seht auf die Krone: / selber der Herr wird den Siegern zum Lohne.
7. O du Lamm Gottes, da, da wird man sehen / eine gewaltige, siegende Schar / deine unendliche Hoheit erhöhen. / Alles, was Odem hat, ruft: / Er ist's gar! Sehet, / wie Kronen und Throne hinfallen; / höret, wie donnernde Stimmen erschallen.
8. Reichtum, Kraft, Weisheit, Preis, Stärke, Lob, / Ehre Gott und dem Lamme, dem Heiligen Geist! / Wenn ich da stünde, o wenn ich da wäre! / Springet, ihr Bande, ihr Feseln zerreißt! / Amen, die Liebe wird wahrlich erhören. / Alles, was in mir ist, lobe den Herren!

## 21-56「主よ、いのちのパンをさき」

## Break Thou the Bread of Life

1. Break Thou the bread of life, dear Lord, to me, / As Thou didst break the loaves beside the sea; / Beyond the sacred page I seek Thee, Lord; / My spirit pants for Thee, O living Word!
2. Bless Thou the truth, dear Lord, to me, to me, / As Thou didst bless the bread by Galilee; / Then shall all bondage cease, all fetters fall; / And I shall find my peace, my all in all.
3. Thou art the bread of life, O Lord, to me, / Thy holy Word the truth that saveth me; / Give me to eat and live with Thee above; / Teach me to love Thy truth, for Thou art love.
4. Oh, send Thy Spirit, Lord, now unto me, / That He may touch my eyes, and make me see: / Show me the truth concealed within Thy Word, / And in Thy Book revealed I see the Lord.

## 21-516「主の招く声」

## How clear is our vocation, Lord

1. How clear is our vocation, Lord, / when once we heed your call: / to live according to your word, / and daily learn, refreshed, restored, / that you are Lord of all, / and will not let us fall.
2. But if, forgetful, we should find / your yoke is hard to bear; / if worldly pressures fray the mind, / and love itself cannot unwind / its tangled skein of care: / our inward life repair.
3. We marvel how your saints become / in hindrances more sure; / whose joyful virtues put to shame / the casual way we wear your name, / and by our faults obscure / your power to cleanse and cure.
4. In what you give us, Lord, to do, / together or alone, / in old routines and ventures new, / may we not cease to look to you, / the cross you hung upon / all you endeavored done.